

### 3. 紹介「海外に学ぶ」：イタリア・ボローニャ Bologna

〔Japa 理事 小畑さいち：青山学院大学元客員教授、元外資系 IT 企業〕

筆者は外資系企業において長年、開発、マーケティング、テクニカルサポート統括などに従事、駐在・出張などにおける業務で海外都市を多く訪問。のちに大学教員に転じ学会・調査などで都市・地域訪問が度々あったことから、海外都市・地域に関する見聞経験また知見を得てこれら都市・地域に関して知りえた街の地域創生と再生について平易にコラム風に記述したものです。

ボローニャ Bologna（イタリア）はコンベンション産業・文化芸術が併存するイタリア有数の観光・コンベンション都市である。2000年には文化推進街づくりが認められ「欧州文化首都」に選定された。また2006年からボローニャの重要な都市景観の一部であるポルティコ\*1群によって構成される街区・景観がユネスコの世界遺産候補としてイタリアの候補暫定リストに入り、世界遺産となる見込みである。

\*1 ポルティコ：建物前に柱列によって支えられる歩行回廊、柱列と建物壁によって囲まれた歩道と天井があるアーケード構造建造物



ポルティコ（歩行回廊）

ボローニャは1950年代に急激な工業化により、郊外・南部などから人口流入が著しく極端な住宅不足が発生し、中心地では人口過密による居住環境の悪化から高所得者層の多くは郊外へと転出し、中心地は低所得者層住民が主となり、空き家も増え人口減少により空洞化が進んだ。



ボローニャ中心街

古びた建物が並ぶ中心地は衰退傾向が顕著になったことで、危機感を持ったボローニャ市は中心部の再活性化計画の検討に入った。都市改革主義などの思想を取り入れ、スクラップ&ビルトによる従来型の再開発手法を採らず「外装は伝統様式を踏襲修景し、住空間は内装リフォームによって居住環境を改善して住民に提供する」方式を構想の基本とした。



ボローニャ大学旧館(現図書館)

そのために、街基盤を活かし修景を実施し、内部住空間を一新し、近代化した上で住民を収容する公営住宅の建て替え整備とする公共事業とした。「土地政策と都市再整備を一体化」による都市再生整備計画である。

庶民の暮らしを守りつつ、中心地に賑わいを取り戻し発展させることによって、持続可能な都市基盤のために従来型再生計画と一線を画して街区をまるごと建替えるという「街区単位の整備事業として再生する」とした。

同時に、遊休工場空間・休眠施設の転用により住民が憩う文化施設の充実も組み込み、「暮らし重視」の街再活性化を図る「旧街区の修景・新機能付加による近代化」へと現実的な整備計画とした。



マッジョーレ広場周辺と高い斜塔群

ハードのみならずソフト面においても文化施設充実により文化環境レベルアップを行い住民生活の質向上を目指し、総合的な保存改善計画で都市としての「暮らし良さ」、

「持続性」を構想の基本軸とした「社会的保存」と呼ぶボローニャ方式が取られた。このようなイタリアにおける街の再活性化対応のひとつとして一石を投じたこの都市整備事業は、ソルフェリーノとサン・レオナルド地区にも適用されることとなった。

結果として、生まれ変わった再開発街区は、暮らしの満足と文化環境の質的向上によって生活のし易さが人気となり賑わいを取り戻し再活性化した。この再開発により不動産の価値が高まり、民間による街の再生計画を誘発し、周辺の街の再活性化が促進され、住民の8割近くが引き続き住みたい街としてボローニャ市が「暮らし」・「しごと」・「文化」が調和した街として人気を得ることとなった。

- ・住民の暮らしを優先した街区一体化による再生計画
- ・伝統的様式建物を活かし街区の修景と建物内部の近代化リフォームによる修復
- ・住民の交流親睦のため遊休建物・施設を改装し文化施設へ転用
- ・再生計画で従来型の「スクラップ&ビルド」によらず「社会的保存」を構想

上記のような要素を含んだボローニャ市の再活性化計画は、既存の社会基盤を活かしつつ改善保存するという現実的な都市整備事業のあり方の有効性が注目され、創造都市モデルとして賞賛されている。

#### 【出典・参考】

- (1) <https://www.bolognawelcome.com/>
- (2) 「イタリア都市再生の論理」陣内秀信 鹿島出版会 1978年
- (3) 「にぎわいを呼ぶイタリアのまちづくり」宗田好史 学芸出版社 2000年
- (4) NHKスペシャル「井上ひさしのボローニャ日記」2004年放送（注：YouTubeで参照可）
- (5) 「ボローニャの大実験-都市を創る市民力」星野まりこ 講談社 2006年